

# 国語教科書における漢詩「春暁」をめぐって

松尾 肇子\*

## 1. 作者および作品

日本人に広く知られる「春眠暁を覚えず」は、唐・孟浩然の五言絶句「春暁」詩の起句である。全詩は以下のとおり<sup>1</sup>。

春暁 孟浩然

春眠不覚暁、処処聞啼鳥。夜来風雨声、花落知多少。

小学校・中学校・高等学校で現在使用されている各社の国語科の教科書をみると、この詩は、いずれの校種においても少なくとも2社以上の教科書に掲載されている。このような作品は「春暁」詩以外にはない。本稿では教科書における「春暁」詩の提示について、該詩の視覚化に着目し、また平成20（2008）年の学習指導要領で提示された「古典の解説」ないしは「古典に関連する文章」を検討して、若干の考察を加えたい。

作者の孟浩然（689～740年）は、盛唐を代表する詩人の一人である。往時の中国人は名と字とを持っていたが、彼については浩然が名であり字であるとも、名は浩で字は浩然であるともいう。現行教科書はすべて名も字も浩然と記す。襄陽（湖北省）の出身で、若くして襄陽の東南にある鹿門山に隠棲した。のちに官職を求めて2度長安へ赴いたがかなわず、晩年に至って張九齡の幕臣であった時期はあるものの、官界とはほとんど無縁の生涯をおくった。この間、旅に出ては李白や王昌齡などの著名な詩人と交遊した。旧知の王昌齡が襄陽を訪れたのをもてなすために宴を開き病を悪化させて死去した逸話はよく知られる。該詩の製作年は不明だが、故郷に隠棲していた時とするのが通説である。

彼は南朝詩の影響をうけ、自然を詠じる名手として、王維とならんで高く評価されている。五言詩を得意とし、現在残されている約270首の詩のうち半数近くが五言律詩である一方、五言絶句は19首しか残らず、「春暁」詩はそのうちの1首である。一般に、五言絶句という詩形は字数が極めて厳しく制限されるため、語と語との飛躍が大きく、実作も読解も難しいとされる。該詩は、ごく平易な20文字の中に、今朝と昨晚、室内と屋外と、振幅大きく時間と空間とを行き来させて秀逸である。また象徴性が高く、「春の暁」という具体的な時間も場所も示さない詩題もその内容も、具体的状況を捨象している。詩中の人物が作者（読書人）であるとするならば、早朝から出勤したり労働したりせずすむ状況は世俗を離れていることを示すのであり、それを隠逸の立場を享受する作品として読むことも失意の詩として読むこともできる。さらに聴覚を刺激する「鳥」も視覚をになう「花」も、抽象度が極めて高い。それでいて、一首全体に穏やかさ・明るさ・華やかさ・季節の推移・かなしさ等々、イメージを重層的に重ねながら、春の朝を描き出す名作である。この作品について多くの論考が提出され続けているのもうなずける。

## 2. 教科書における「春暁」詩掲載状況の推移

冒頭に「春暁」詩は教科書に広く採用されていると述べたが、それは戦後の検定教科書制度以降の状況であって、戦前の漢文教科書でこの詩を採用するものは多くない<sup>2</sup>。本章では「春暁」詩の教材化の状況

\* 東海学園大学人文学部人文学科教授

を概観しておきたい。

戦前において「春暁」詩は旧制中学校の教科書に載録されている。そのひとつ、飯島忠夫編『新撰漢文教科書 卷二』（三省堂、昭和8（1933）年改訂版、修正4版）<sup>3</sup>には「一一 春景二題」として、孟浩然の「春暁」と明・高啓の「尋胡隱君」の2首が掲載されている。また加藤虎之亮編『皇国漢文 卷四』（中等学校教科書昭和16（1941）年新制改版、訂正3版）<sup>4</sup>では「唐賢遺詠」の単元に、杜甫の「春望」、寒山の「無題」、拾得の「無題」、崔顥の「黃鶴樓」、韓愈の「左遷至藍關示姪孫湘」、白樂天の「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」、盧僎の「南樓望」、王維の「竹里館」、孟浩然の「春暁」、李白の「靜夜思」、韋應物の「秋夜寄丘二十二員外」、王昌齡の「從軍行」、王翰の「涼州詞」、張謂の「題長安主人壁」、張繼の「楓橋夜泊」、王之漁<sup>5</sup>の「涼州詞」、司空曙の「江村即事」が収録されている。網羅的調査ではないものの、80点余の漢文教科書の中で2点の教科書にしか収録を見いだすことができなかつたのは少ないと言わざるを得ない。しかしそれは「春暁」が読まれなかつたということではないと思う。「春暁」は『唐詩選』に収録されているが、江戸時代以来『唐詩選』ほど広く読まれた漢詩選集はなく、明治時代にも多種多様な『唐詩選』が出版された<sup>6</sup>。教科書で学ばなくても耳にし目にする作品だっただろう。しかしながら、日清戦争勝利を機に日本が西洋文化へ完全に舵を切り、また明治30年代には言文一致体が確立し、全ての新聞の社説が漢文訓読体から言文一致体へと改められたのが大正11年であること<sup>7</sup>に鑑みれば、先述の教科書2点が昭和（初版は大正に遡るか）の出版物であることは、漢詩が日常生活から遠くなり、教科書で漢詩を扱う必要が増したことの反映とみることもできよう<sup>8</sup>。

それでは、「春暁」詩が国語科教科書に登場するようになったのはいつからか。東京書籍株式会社附設教科書図書館・東書文庫<sup>9</sup>によって検索してみると、戦後の新制学校制度にともなう学習指導要領の策定が一段落した後のことである。中学校の教科書で最も早いのは、秀英出版『私たちの文学 3上』昭和27（1952）年である。これは、昭和26（1951）年改訂版『中学校高等学校 学習指導要領 国語科編（試案）』の中学校の目標として「11 やさしい文語文や漢文体の文章を読むことができる」と古典の学習が記載されたのを受けたものであろう<sup>10</sup>。さらに、昭和33（1958）年の『中学校学習指導要領』改訂の前後には各社の中学校教科書に掲載された。以下のように中学校2年生あるいは3年生の教材である。

大修館書店『新中学国語 総合2下 新訂版』昭和32（1957）年

中央図書出版社『国語 総合中学校用 3』昭和33（1958）年

大日本図書『私たちの国語 3』昭和37（1962）年

昭和33年（1958）改訂版『中学校学習指導要領』国語〔第2学年〕（読むこと）（3）には「古典に関心をもたせるように書いた文章、翻訳作品、格言、故事や成語、短くてやさしい文語文など」とあり、〔第3学年〕（読むこと）（3）では「現代語訳や注釈などをつけたり書き下したりして理解しやすくした古典などを用いることを考慮」とある。さらに昭和44（1969）年の『中学校学習指導要領』の「内容の取り扱い」4（3）には「古典の指導については、古典に対する関心を深め、古典として価値のある古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること」とあり「漢文においては書き下し文を併用するなどくふうするようにすること。なお、文語や訓点のきまりについては、教材を読むのに必要があれば触れる程度にとどめること」として、ようやく「漢文」が明記された。このように戦後の古典学習の復活に際して選ばれたのが「春暁」詩だったのである。

そして、はるかに遅れてのことではあるが、小学校教科書においても同様の事態が見て取れる。小学校国語科に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が置かれ、「ア 伝統的な言語文化に関する事項（ア）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」とされたのは、平成20（2008）年の学習指導要領である。このとき、「春暁」詩はほぼすべての教科書に採用され<sup>11</sup>、小学校高学年に配されている。

教育出版『ひろがる言葉 小学国語』5年生「日本語のひびきを味わう 漢文に親しむ」

三省堂 『小学生の国語』5年生「学びを拓げる 読書の時間 漢詩」

東京書籍 『新しい国語』6年生「日本の言の葉 漢文を読んでみよう」

光村図書 『国語』6年生「季節の言葉」

ここでも、学習指導要領にいうところの「親しみやすい」漢文の代表として「春暁」詩が選ばれたと考えられる。漢詩としての「春暁」詩が、内容的にも構成的にも決して平易なものではないことは、先に述べたとおりである。それでもなお該詩が教科書に採用される理由としては、使用されている文字に難読の漢字がないこと、また句形も特殊なものがないこと、書き下し文が長くならないこと、起承転結の解説に適していることなどを挙げることができるだろう。また、春という季節を主題とする点で、日本の古典と対照させるのに便利でもあったかと思われる。

次に、現在使用されている教科書での載録状況を紹介する。後述の都合上、校種を分けず通し番号を付す。小学校では5年生の教科書に漢文が紹介されるが、平成27(2015)年発行版では上記の4社から2社に減少している<sup>12</sup>。「春暁」詩を載録する2社のとりあつかいは次のとおり。

①教育出版 国語537『ひろがる言葉 小学国語五年上』「二、日本語のひびきを味わおう 漢文に親しむ」

「春暁」は冒頭の解説教材。白文・常用字体と現代仮名遣いによる書下し文・現代語訳を載せる。ほかに蘇軾の「春夜」、李白の「静夜思」を採録するが、白文は無く、書下し文と現代語訳とを掲載。

②光村図書 国語539『国語五 銀河』「声に出して楽しもう 古典の世界(二)」

「論語」と「漢詩」とに分けて掲載。漢詩は「春暁」のみ。いずれも常用字体による書下し文を掲載。仮名は、歴史的仮名遣いに( )で現代仮名遣いを添えている。

つづいて中学校教科書について見てみると、漢詩としては、杜甫の「春望」と李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の掲載率が極めて高い。「春暁」詩は、三省堂と光村図書との2社に載録され、漢詩の単元の冒頭に置かれている。

③三省堂 国語808『現代の国語2』「漢詩の世界」

「春暁」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春望」の順に載録。五言詩である「春暁」詩と「春望」詩とは書下し文と訓読文とを上下に配し、七言詩は書下し文と訓読文を前後に置く。また右ルビは平仮名で旧仮名遣いを、左ルビは片仮名で現代仮名遣いを示している。

④光村図書 国語826『国語2』「いにしへの心を訪ねる」「漢詩の風景 石川忠久」

「春暁」、杜甫の「絶句」、「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を採録。いずれも書下し文と訓読文とを上下に配する。また右ルビは平仮名で旧仮名遣いを、その更に右の( )に片仮名で現代仮名遣いを示す。各詩の後には石川氏の解説文が置かれている。これについては後述する。

最後に、高等学校では7社(⑤教育出版294・⑥三省堂306・⑦第1学習社327・⑧大修館書店314・⑨筑摩書房322・⑩東京書籍304・⑪明治書院318)の『国語総合』の教科書において、漢詩の単元に訓読文で載録されている<sup>13</sup>。一方、『古典B』の教科書には収録されていない。これは、戦後の教科書における採録の歴史に見られたのと同じく、「春暁」詩が入門教材として位置づけられていることの反映と考えられる。

### 3. 「春暁」詩の視覚化

教科書の判型がA6版からB5版へと大型化し、中学校の国語までB5版になったのは平成24(2012)年のことである。また、白黒印刷からカラーの図版を多用するものへと変化し、古典学習においても美しい色彩の図版や写真が使用されるようになった。

視覚的に美しい画像を添えて文学作品を提供することは中国ではかなり早く、印刷業が隆盛し版画技術が高度に発展した明代に顕著に行われた<sup>14</sup>。なかんずく、覆刻版(1672および1710年)が出版されるなど日本への影響が明らかなのは『唐詩画譜』である。『唐詩画譜』は、明の黄鳳池が編纂した『八種画譜』

のうちの『五言唐詩画譜』『六言唐詩画譜』『七言唐詩画譜』の3種の総称である。基本的に1首の詩ごとに1枚の画面を用意している。他に古今画譜・名公扇譜・梅竹蘭菊・木本花鳥・草本花詩の5種の画譜がある。これらは万曆天啓年間（1573～1628）に刊行された。その影響をうけて、日本でも『唐詩選』の絵画化が行われている。本章ではまずこれらの画譜における「春暁」詩をみたのち<sup>15</sup>、教科書に話を進める。

中国・明代の『唐詩画譜』は1首に1葉を用意するが、「春暁」詩では表半葉の画に対して、詩は裏の半葉に截然と分かれている。花枝にとまった1羽の鳥が、落ちていく1輪の花と2片の花びらを見ている<sup>16</sup>。この構図が『八種画譜』の一本『木本花鳥画譜』に収録される「単弁桃」の画と極めてよく似ていることについては、張小鋼氏に指摘がある<sup>17</sup>。「単弁桃（一重の桃）」には「有紅白深紅三色、傍水迎柳下栽之可觀、春季之盛景也、俱結大実可飡（紅・白・深紅の三色がある。水辺の柳の下に植えると美しく、春の盛りの風景である。どれも大きな実をつけて食べることができる）」とある。緑の中を散る紅の花びらを想起させる絵である。しかし、「春暁」詩の画譜に描かれる花は単弁桃とは異なり、花びらに三つの切れ目があり蕊が目立つ。これは同じく『木本花鳥画譜』に描かれる梨花である。その「梨花二種」には「有香臭二種。其梨之妙者、花不作氣、酔月歌風、含煙帶雨、瀟洒手神、莫可与並（香・臭の二種類がある。梨のすばらしいところはといえば、花がおだやかで、月に酔い風に身を寄せ、もやを含み雨を運び、きよらかにすっきりとして、比べられるものがない）」とある。梨の花は白く、二十四番花信風では桃よりも遅く晩春に咲く。唐・白居易の「長恨歌」の楊貴妃を喩えた有名な一句「梨花一枝春帶雨」の影響か、雨の夜に似合う花というイメージを持つことをこの文章は示している。一方、鳥は目の下からのどにかけて白く、全体に細かな斑点が施されているが種類ははっきりしない。モズであろうか。「春暁」詩の「啼鳥」に、王維の「聽百舌鳥」詩の「入春解作千般語、払曙能先百鳥啼（春に入りて解（よ）く千般の語を作（な）す、曙を払いて能く百鳥の啼くに先ず）」が注されている<sup>18</sup>のもその証左となるだろう。

日本において画を起こした書物では『唐詩選画本』と『画本唐詩選五言絶句』との2種類を確認できた。いずれも『唐詩画譜』とは異なり、1葉に詩1首の情景を描き出そうとしている。『唐詩選画本』（嵩山房、天明8（1788）年）<sup>19</sup>は、画面右半分は室内を描く。山水楼阁図が描かれた屏風を立て渡して、戸外は見えないことを示している。その中で「閨の少婦がまだ完全に目が覚めていない様子で、枕の上に伏していて目が閉じたままである」<sup>20</sup>。左手の庭にはこんもりとした葉（黒い丸で示される）よりも多く満開の花（白い丸）をつけたかなり高い木が2本と、その枝の下を遊び飛ぶ2羽の雀が描かれ、地面には花が散り敷いている。木の種類は特定できない。全画面の左4分の1程度に縦の線を引いて「春暁」詩が大きく書かれ、題下に平仮名の書下し文、詩の左に平仮名の解説がある。並び立つ2本の木と戯れる2羽の鳥は、画意が閨怨（若い女性が一人寝するうらみ）にあることを暗示する。

『画本唐詩選五言絶句』（嵩山房、明治13（1880）年）<sup>21</sup>は、画面左半分に室内を描く。頭に巾をつけた男性がベッドの上で半身を起こそうとして右手を枕に置き、左手は掛け布団をはねのけようとしている。後ろ姿ではあるが顔をおこし、視線は庭に向けられている。枕元には2冊の書物が置かれ、彼が読書人であることを示している。右半分の庭の風景は、手前に太湖石と芭蕉、奥には太湖石とその向こうに草花がわずかに見え、その上空を花びらが舞っているが、花を散らせている木の姿は無い。また鳥の姿も無い。視線が向けられていることで鳥の声を暗示しているとみることもできる。「春暁」詩が画面左手、男性の寝姿の上に単辺で四角く囲んで白文で提示されている。

以上、3種類の和刻本画譜に描かれた「春暁」詩は、該詩について多様な解釈が可能であることを裏付けるものではあるが、逆に言えば、読者にかなり明確な解釈を与えていることも理解されよう。また、「花」については、『唐詩画譜』では梨の花がひそやかに散りおちている。『唐詩選画本』では「花」は木の花であるが丸で描かれており種類は特定できない。『画本唐詩選五言絶句』では丸い花びらだけが舞い散っており、読者の解釈に委ねられていると言えよう。

ところで、現在の教科書では古典教材に写真を添えることが多く、漢文でも美しいカラー写真がふんだんに用いられている。ただ、日本人が中国へ取材に入ることができるようになったのは比較的近年のことである。多くの人を知るのはNHK『漢詩紀行』であろう。平成元（1989）年に第一シリーズが放映されてから平成12（2000）年まで続いたこの番組は、中国で撮影した美しい映像と俳優による朗読とで多くのファンを得た。書籍化もされ、写真を多数使用した同名シリーズがある。撮影は山口直樹氏。その『NHK新漢詩紀行 友愛深厚篇』（日本放送出版協会、2009年）の冒頭に掲げられた「春暁」詩に添えられたカラー写真は2枚で、「襄陽県鹿門山、鹿門寺境内」のキャプションが添えられた雨に濡れた木蘭のつぼみの写真と、苔むした岩に桃色の小さな野草の花が懸命に咲き1輪を落としている「襄陽県鹿門山麓で池のほとりに苔むす岩」のキャプションのある写真である。山口氏には中国古典に取材した多くの本があり、中国専門のフィルムライブラリーを設立したという<sup>22</sup>。

では教科書では「春暁」詩はどのように提示されているだろうか。まず小学校の国語教科書について紹介する。以下の教科書の番号は前掲の現行教科書の番号である。それぞれの書誌については前章を参照していただきたい。①教育出版・小学5年では、春暁の白文の下に香色表紙の和刻本『唐詩選』の表紙と中を開いた1冊との写真、さらにその上に丸囲みで「春暁」詩の題と、訓点が施された第一句の一部分を拡大した写真とが、どちらもカラー写真で示されており、「江戸時代に発行された漢文の本」というキャプションが付けられている。教科書本文は次の段落に、「日本人は、漢字を読む順序を変えたり、送り仮名をおぎなったり、くふうして、中国の詩に親しんできました」とあり、画像と対応する。ちなみに、次の蘇軾の「春夜」詩と李白の「静夜思」詩とはそれぞれ1枚ずつ、中国で撮影された風景写真がカラーで添えられている。②光村図書・小学5年では、見開きで右に『論語』2条、左に「春暁」詩が配されており、この見開き2頁は他と異なるうすいクリーム色の地色であり、上端には雷文が施されて、中国的な雰囲気企図されている。『論語』の下に藍表紙の和刻本『論語集註』1冊と朱の断句がはっきりと見えるように開いた1冊とがカラー写真で掲載されている。また教科書の見開き右頁右端には孔子像らしき絵が、左頁の「春暁」詩の下には花とつぼみがついた枝が3本、いずれもクリーム色の地色に白抜きで描かれている。花は5弁の丸い花びらに蕊が目立つので、梅を模したものであろう。2社ともに和刻本の画像を添えて、中国文化を受容してきた歴史的経緯を示そうとしていると考えられる。

中学校の教科書ではどうであろうか。③三省堂・中学2年は、書下し文と訓読文、それに語注という簡略な提示をしている。「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩だけにモノクロの楼閣図が添えられており、「黄鶴楼（『唐詩選画本』による）」とのキャプションがある。④光村図書・中学2年は3首の詩にそれぞれ1枚のカラー写真と石川忠久氏による書きおろしの解説文とが添えられている。解説文については後述する。「春暁」詩の解説文には「花」「鳥」の詩語がそのまま用いられている。写真のキャプションは「春の朝」で、満開の桃の花枝のむこうに白壁の家々となだらかな山容を配した、江南地方郊外の春の風景である。なお、先に述べた通り、光村図書は現行の小学校教科書②においても「春暁」詩を掲載しており、それには梅の絵が添えられている。同一の詩ではあるが、小学校と中学校とで異なる視覚教材を用いている。小学校では、生徒が自分の経験に引きつけやすいことをねらいとしているのであろうか。

高等学校においてはどの教科書も訓読文と図像を掲載している。そのうち花の図像を用いないのは⑨筑摩書房と⑩東京書籍との2社である。⑩東京書籍は、「唐詩-九首」の単元の冒頭に「春暁」詩を置き、その下に「唐詩関係図」として当該単元にとりあげた詩に関係する詩跡を地図に示している。⑨筑摩書房は「唐詩一」の単元の最初に「春暁」詩を置き、キャプションを「孟浩然（『詩仙堂志』）」として彼の肖像をモノクロで付している。それ以外の教科書の写真はいずれも花で、それは桃と思われる。⑤教育出版と⑥三省堂とは画像処理が微妙に異なるものの同一の写真である。薄紅と濃い紅とが混じる源平桃の花とその下に散り落ちた花びら、緑の草、木立のさらに奥にはもっと紅い落花が散り敷いている。⑥三省堂には「唐大慈恩寺遺址公園（陝西省西安市）」のキャプションがある。これは山口直樹氏の『図説漢詩の世

界 ふうろうの本』(河出書房新社、2002年)に「春暁」詩とともに掲載されている写真と同じ。そのキャプションには「はなやかな春の花を代表するのが桃、その花は樹下に落ち地面を色どる(西安春暁園)」とある。⑧大修館書店の写真も加工してあるが、紅の八重の花は園芸品種の桃であろう、前記の写真と同じく背景に樹木の緑を配している。⑩明治書院の写真は木立であるが、その中心は、地面が見えないほど一面に散り敷いた桃色の花びらにある。⑦第一学習社の写真も落花を中心にしている。紅い花をまだ付けている桃の老木の枝にも幹にも、手前の緑のイブキにも桃色の花びらが散りかかっている。これも山口氏による写真である。以上のように、「春暁」詩について言えば、「花」を桃として読む方向を写真は指し示している。日本の都市部の生徒は、桃の花といっても雛祭りの頃に花瓶に挿した枝を見る程度だろうから、教科書の画像は大切な情報源である。また高等学校教科書が花木だけの写真を掲載するのには、江戸の画本のように解釈を限定する視覚教材にはしないという方針もあるように推測される。「漢詩」単位について言えば、富士山のような単峰ではなく山並みに上る月であったり、三峡であったりと、「春暁」詩に限らず外国の風景を印象づける写真が選ばれている。日本人が漢詩漢文を読むとき、訪れたことのない中国の風景や産物については自分の知識経験、つまり日本のそれから類推するのが一般的である。それに対する配慮であろう。

以上に見てきたように、各教科書は、漢文というものがあることを知り文語文のリズムに親しむことを目的とする小学生、文語文を読むことに取り組む中学生、作品世界を鑑賞することを目指す高校生と、それぞれに応じた視覚教材を掲載する方針をとっていると言えるだろう。

#### 4. 「春暁」詩と解説紹介文

平成20(2008)年3月(平成22年11月一部改正)『中学校学習指導要領』国語科「指導計画の作成と内容の取扱い」第3項の留意事項(5)に「古典に関する教材については、古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げる」という1条が加わった。平成21(2009)年『高等学校学習指導要領』においても同様に「国語総合」3(6)留意事項イに「古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関連する近代以降の文章を含めること」との1条がある。これを受けて漢文教材にも鑑賞や解説・紹介の文章を載せるようになった。「春暁」詩については、④光村図書・中学2年が載録する石川忠久氏の解説文と、⑧大修館書店・高等学校『国語総合』が掲載する一海知義氏の紹介文とがある。

中学生に向けて「春暁」詩を紹介する石川氏の文章は書きおろしである。全5段落で構成されている。第一段落は「春暁」詩の第一句から順に、句を追って平易に解釈する。ただし冒頭は次のように、第一句に詩題の解説を含んで、少し文字数を費やしている。

春の眠りは、誰しも経験があるように、非常に気持ちのよいものです。寒くてつらい、長かった冬も過ぎ、いよいよ春になったぞという喜びを、「暁を覚えず」、つまり、夜が明けたのも気づかないぬくぬくとした眠りで表しています。

第二段落は、孟浩然が鹿門山に隠棲していた時の隠逸詩であることを簡潔に紹介する。第三段落で絶句の紹介と起承転結が用いられていることをごく簡単に述べる。単元末に「律詩について」のコーナーを置いて近体詩についての解説は譲っている。第四段落は「春暁」詩における起承転結を解説して最も長い。第五段落は「この構成法は誰かが考え出したものではなく、永年の知恵で自然に定まったものなのです」の一文だけである。石川氏の解説は、第一段落で大意を示し、第四段落で起承転結の説明をすると同時に、作者の工夫とねらいを丁寧に述べて鑑賞を深めている。該詩の起承転結の巧みさは誰もが認めるところで<sup>23</sup>、初めて漢詩を読解する中学生に対して、起承転結の構成法を詩句に即してかなり踏み込んで説明

している。この解説の中では鳥も花も特に解説はされないが、結句について「読者の眼前には、庭一面に散り敷いた花びらが、ぱっと広がります。花びらは雨にぬれ、朝日を浴びていよいよ鮮やかです」とあり、同じページの枝にぎっしりと咲く花の写真と対照をなしている。なお、すぐに掲載される杜甫の「絶句」についての紹介では、「花欲然（花 然えんと欲す）」を解説して「この花は、つつじか何かでしょうか」と花の種類を述べている。

⑧大修館書店『国語総合』に載せる一海知義氏の文章も書きおろしと思われる。「春眠」「处处」「聞」「啼鳥」「夜来」「多少」の詩語を説明し、最後に井伏鱒二と土岐善麿の訳詩をそれぞれに挙げて終わる<sup>24</sup>。同ページの「学習のポイント」に「筆者の説明に従って、「春暁」の詩を自分の言葉で現代語訳してみよう」とあり、敢えて訳出を避けていることが分かる。一海氏の文章は、「聞」の釈義から「聞」と「聴」・「見」と「視」という類語の使い分け、また「時」および「多少」の釈義から日中同形異義語に気づかせる含意を持つ。高校生に向けて、これ以後学習する他の詩においても注意すべき点に意識を向けさせる意図があるものと思われ、起承転結についても「第三句は場面を転じて、昨夜のことをうたいます。そして第四句で結ぶ」として過剰な説明を避け、教師と生徒に委ねていることが察せられる。「啼鳥」については、脚韻を合わせるための「鳥啼」の転倒であることを述べているが、鳥そのものについての解説はない。「花」についても「花」としか記していないが、井伏鱒二訳には「木ノ花」とあり、また冒頭に詩とともに紅い桃花の写真が掲載されていることは先に述べたとおりである。

ところで、一海氏については、別の文章が大修館書店『国語総合 古典編』（国総312、平成26（2014）年発行）に掲載されていた。漢文編「唐代の物語」の単元で、「人面桃花」の後に置かれた「漢文のとびら」の「桃いろいろ」と題される一文<sup>25</sup>である。この文章には様々な桃に関することわざや作品が紹介され、その情報量は高校1年生には少し多すぎるかもしれないほどであり、桃が中国文化において欠かせない素材であることが十分に説明されている。現行『学習指導要領』「国語総合」〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕「(1) ア伝統的な言語文化に関する事項」には「(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」とあるのに対応するものとして採用されたのであろう。この文章中には杜甫の「絶句」全詩の訓読文が示され、その「花欲然」については王維の「網川別業」詩の「雨中草色緑堪染、水上桃花紅欲然（雨中の草色は緑にして染むに堪え、水上の桃花は紅くして然えんと欲す）」句によって「桃の花」ではないかとする説を紹介する。先に挙げた石川氏の「つつじかなにか」とは異なる見解である。

古典の中でも最も遠いと感じられている漢文を、現代の日本人がどのように読むのがよいのか。教科書に該詩とともに掲載された二人の中国文学者の文章は、単に対象の学年が異なるばかりではなく、ふたつの立場をそれぞれ代表しているように思われる。すなわち漢詩も日本の文学の一部として位置づけようとする立場と、外国文学として対象化しようとする立場とである。

一海氏のいうとおり、「中国人と桃の花との関係」は長く深く、中国文学を学ぶ者にとっては基礎知識と言えるのであるが、現代日本人の多くにとってはそうではない。以下に筆者が関西地方のA大学と東海地方のB大学との2校の私立大学で、孟浩然の「春暁」詩の鳥と花をどうイメージするかを書いてもらった結果を紹介する。いずれも中国語を学習したうえで、筆者の中国古典文学の授業を履修している学部1～4年生各15名が対象である。ただし、A大学は留学未経験、B大学は全員が早春から夏にかけて4ヶ月弱の中国留学を経験している。なお「春暁」詩は既習だが内容はよく覚えていないという者がほとんどだった。

#### A. 鳥について具体的な種類があがったもの

鶯・雀各5名（うち1名は「鶯か雀」と記していたので重複して数えた）、燕・雁各1名  
鳥の種類以外の回答

そこらじゅうにいる雀みたいな鳥・春の知らせを告げる鳥・悲しそうに鳴く鳥各1名

花について具体的な種類があがったもの

梅 4 名、桜 3 名、椿 2 名

花の種類以外の回答

咲き誇っている花・自宅の周りに咲いている花・道ばたに咲いている花・小さくもろい花各 1 名

組合せとしては、鶯と梅、鶯と桜、雀と桜が、それぞれ 2 名ずつであった。

B. 鳥について具体的な種類があがったもの

鶯 2 名、雀 2 名、ホトトギス 1 名

鳥の種類以外の回答

小鳥 4 名、鳥 3 名、二、三羽の鳥 2 名

花について具体的な種類があがったもの

桜 5 名、梅 3 名

花の種類以外の回答

庭の木の花 2 名、赤い花・咲き誇る花・小さな花・春の花たち・舞い落ちた花びら各 1 名

複数の回答者がある組合せは無かった。

2 大学を総合すると、「鳥」は鶯と雀が同数でほとんどを占め、「花」は梅と桜が拮抗している。『唐詩画譜』に描かれた「梨」「百舌」とする回答は無かった。梅と桜の順位は入れ替わっているが、2 大学における留学経験の有無はほとんど関係していないようである。それでも中国渡航経験のない A 大学に「俳句では花は桜を意味しているので桜」と記した者が 1 名、また留学経験のある B 大学には「中国ならば桜ではないから梅」と記した者 1 名がいた。おそらく学生の脳裏にあるのはソメイヨシノであろうが、中国で桜を見ることは実際に稀である。特に記述のない学生についても、桜とした者は、日本文学の地続きに「春暁」詩を読んでいるといえるだろう。

## 5. おわりに

本稿では人口に膾炙したというにふさわしい「春暁」詩を取り上げ、誰もが教科書でこの詩を読んだという経験をするようになったのは戦後であること、それは初等教育・中等教育を問わず漢文の入門教材という位置づけであることを確認した。そして該詩が視覚化される時には「花」が重要な要素であること、それは現在の国語科教科書、特に高等学校においては比較的はっきりと桃に同定されていることも確かめられた。しかし日本人がこの詩を読んで感じる花や鳥が日本におけるそれであることも否定できないことをアンケート結果は示している。本稿はもちろんその是非を論じるものではない。倉石武四郎が中国の文学を、古典も含めて中国語によって音読すべきだと説いたのは、もう半世紀以上前のことだが、平成 29 (2017) 年からは教科書と対応するデジタル教材が登場し、漢詩を中国語の朗読によっても聞くことができるようになった。漢詩とは、漢文とは日本人にとって何かという明治以降続く問いは、漢文を我が国の伝統文化の一翼を担うものとして位置づける国語科教科書においても意味を失わないことに改めて気づかされるのである。

## 注

- 1 該詩には題を「春暁絶句」に作ったり後半を「欲知昨夜風、花落無多少」としたりするテキストもあるが、教科書に載せる詩題・詩句は、『唐詩選』『全唐詩』に同じで、最も通行するテキストである。
- 2 広島大学図書館教科書コレクション <http://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/> および加藤国安編『明治漢文教科書集成』（不二出版、2013年）によって調査した。網羅的ではないが、それほど大きく状況が変

- わることはないと思われる。また国語の成立と漢文のとりあつかいについては多くの論考があるが、ここでは漢文教科書における採用状況に着目する。
- 3 広島大学図書館教科書コレクション41915。
  - 4 広島大学図書館教科書コレクション41954。
  - 5 目次の表記であって本文が確認できないが、王之渙の誤植と思われる。
  - 6 国会図書館の所蔵では明治時代の出版点数は66件を検索しえた。
  - 7 西岡智史「国語科成立期における漢文教科書の推移：秋山四郎編『第一訂正漢文教科書』（明治41（1908）年・第五版）を中心に」『論叢 国語教育学』復刊5（通巻10）号、2014年。
  - 8 国会図書館の所蔵図書では、大正時代の『唐詩選』は14件あるが、そのうち6件が大正元年、2件が大正2（1913）年で、大正9（1920）年を最後の刊行年とする。学校教育では漢文をどうするかが議論されたことが、浮田真弓「大正期の漢文存廃問題に見る漢文観」（『静岡大学教育学部研究報告：教科教育学篇』41、2010年）に紹介されている。
  - 9 昭和11（1936）年に開館した、東京書籍を母体とする教科書図書館。<http://www.tosho-bunko.jp/>
  - 10 以下の学習指導要領の引用はすべて学習指導要領データベース <https://www.nier.go.jp/guideline/> による。
  - 11 加藤直志「小学校国語教科書における古典教材－学習指導要領改訂を受けて－」名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要v.57、2013年。なお学校図書のみは『みんなと学ぶ 小学校 国語』「言葉のリズムやひびきを楽しもう 漢詩を味わおう」において明・高啓の「尋胡隱君」を取り上げ、「春暁」詩は採録していない。
  - 12 三省堂と東京書籍とは漢詩ではなく『論語』を採録する。また学校図書は国語633『みんなと学ぶ 小学校国語六年上』「漢詩」には高啓「尋胡隱君」を掲載。書下し文・白文、紹介風の訳出を添える。
  - 13 複数の『国語総合』教科書を出版している場合も「春暁」詩はすべてに収録されている。（ ）には各出版社の代表として1冊の教科書番号のみ記載した。
  - 14 もちろんこれ以前、1幅の画として以外にも、文字と絵とを一体のものとして提示されることはあった。「詩書画一如」「詩中有画」などの言葉がしめしているように詩が絵画化される歴史は古い。しかし紙の発明以後印刷以前の書籍にあっては一点物としてしか存在し得ず、またにごく限られた範囲の読者による享受に終わる。したがって拙稿では考察の対象としない。
  - 15 『八種画譜』は蓬左文庫所蔵本を調査した。閲覧を許可された名古屋市蓬左文庫に感謝申し上げます。以下、各種の画像については所在情報を示す。
  - 16 国立国会図書館デジタルコレクション『八種画譜』第二冊で画像を見ることができる。これは宝永7（1711）年の覆刻本である。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2557933?tocOpened=1>
  - 17 張小鋼「『唐詩選畫本』考：詩題と画題について」金城学院大学論集・人文科学編、2014。
  - 18 培基『孟浩然詩集箋注』上海古籍出版社、2013年。
  - 19 橋石峰書画。早稲田大学古典籍総合データベース。[http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31\\_e0527/bunko31\\_e0527\\_p0012.jpg](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31_e0527/bunko31_e0527_p0012.jpg)。  
前掲の張小鋼論文にも画像が掲載されている。有木大輔『唐詩選版本研究』（好文出版、2013年）第六章「『唐詩選画本』における絵師の地位」に、出版事情の研究がある。
  - 20 前掲の張小鋼論文p.p.90。
  - 21 葛飾北斎画。国立国会図書館デジタルコレクション『画本唐詩選五言絶句』。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902409>。
  - 22 hontの著者略歴紹介による。[https://honto.jp/netstore/pd-book\\_02212601.html](https://honto.jp/netstore/pd-book_02212601.html)。閲覧2017/05/23。  
「〈山口直樹〉1950年広島県生まれ。桜美林大学中国語中国文学科卒業。中国の文学・歴史をテーマ

とする風景写真家、古代史研究家。中国専門のフィルムライブラリーを設立。著書に『漢詩百景』など。なお山口氏は石川忠久氏に学んでいる。

- 23 高橋幸吉「新<起承転結>考 I」（『メディア・コミュニケーション研究』55、2009年）など、「春暁」詩の起承転結を取り上げる文章は多い。
- 24 ちなみに⑦第一学習社『国語総合』327においても、「唐詩の世界」単元末の「言語活動」のコーナーは「漢詩と訳詩を読み比べる」として、「静夜思」詩と「春暁」詩についてそれぞれ土岐善麿と井伏鱒二との訳詩を掲載している。
- 25 『漢語の知識』（岩波ジュニア新書、1981年）からの掲載である。